西多摩新聞　2022年2月18日（金曜日）

摩　新　聞　（第三種郵便物認可）　第2831号

生ゴミで発電に驚き

地球温暖化やSDGsを学ぶ

羽村武蔵野小

「多様性と社会との出会い」をテーマに総合学習を進める羽村市川崎の市立武蔵野小（海東朝美＝ともみ＝校長、児童数447人）は10日、再生可能エネルギーや地球温暖化などについて「西東京リサイクルセンター」（羽村市緑ケ丘）の大橋徳久取締役会長＝写真上・左＝を招いて環境出前講座を行い、4・5年生160人が2時間の授業を受けた。

同校では社会とつながるプロジェクトを立ち上げ、毎年、地域の人や福祉施設、行政や地域企業などを招きさまざまな話を聴いたり体験を通して社会とのつながりを意識し主体的に問題解決する能力を養う総合的な学習を推進している。

西東京リサイクルセンターは、2015（平成27）年に創業。食品残さ、汚泥、廃油などからバイオガスを生成して再生可能なエネルギーを供給する都市型バイオガス発電所として稼働。年間約850万キロワット（一般家庭の約1550世帯分）の発電量がある。

4年生80人の講座では、大橋さんがスクリーンでセンターの規模やバイオガスの仕組み、作業工程などを紹介。センターでは資源循環システムを可能にしていることをレクチャー、児童たちはノートにメモを取るシーンが見られた。

2時間目は温暖化やSDGsとは何かなどについて解説した後、児童らは4～5人ずつのグループに分かれグループワーク。講座を聴いて感じたこと、今までの学習に何かヒントになったかなど車座になって話し合った＝写真下。その中で「食べ物のカスを使いそのガスで発電していることに驚いた」「CO_2で地球温暖化が進むのであまり火を長時間使わないように」「ペットボトルではなく水筒で飲むようにしたい」などの声が聞かれた。学年主幹の荒井一聡教諭は「これからの時代を生きる子どもたちには激変する社会・環境の中で地球を守る地球人の一員として活躍してほしい」と話していた。

税に関する絵はがきコンクール入賞作品決定

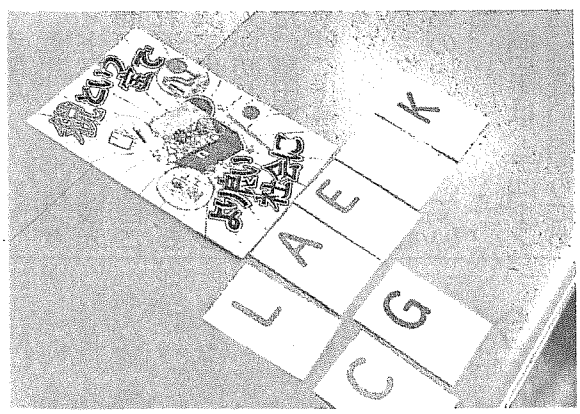
過去最大の応募数

青梅法人会

青梅法人会（加藤和夫会長）は3日、青梅市東青梅の同会研修センターで第12回「税に関する絵はがきコンクール」審査会を開き、最優秀賞、青梅税務署長賞など入賞作品を決めた。

同コンクールは租税教育活動の一環で女性部会が主体となり、青年部会などの協力のもと小学生を対象に実施。各学校に同会関係者が出向き、租税教室を開催している。

青梅税務署管内全小学校52校6年生の児童約3千人に応募用紙を配付。28校が参加し合計1212作品と過去最大の応募が集まった。審査会では1117作品から審査を行った。



票が多く集まった高水さんの作品

庵原哲也署長以下同署員3人、都税事務所の川口圭介青梅支所長、加藤会長、坂本保夫副会長、小峰三枝子女性部会長、東京税理士会の亀岡タケ青梅副支部長、西多摩納税貯蓄組合連合会の宮崎征一郎会長、絵本作家の山本久美子さん、原島秀廣事務局長12人が出席し、審査を行った。

審査基準は税を正しく認識した絵の中・標語になっているか、自分なりに税を考え表現しているかなど。審査員前にカードを学校2点ずつ最優秀賞・金賞・同会女性部会校から1点最優秀賞の法人会連合会ル出品作品決めた。

絵本作家は「作家とことの大切さしさを感じ力作ぞろい庵原署長（々税金といている中で、なコンク意義」と話